



さらさらといけ!

” 学び合い、支え合い、感じ合い、つながり合う “
教えないゼミ



Interview
ビジネスデザイン学部
ビジネスデザイン学科 3年次
柳 智梨 さん

牧野丹奈子 ×
柳智梨 × 山本亜海 対談

※PBL Project Based Learning = 課題解決型学習



PBLの学びを経験して、高校の時の勉強と違うなって思ったことはありますか？



私の高校は神戸で、「神戸学」という地域のことについて学ぶ授業があったんです。アイデア出しはしたのですが、ビジネスデザイン学部ではそれに加えてビジネス的なアプローチ、持続可能性の視点、それを表現するためのプレゼンの仕方学びます。高校の学びをきっかけにして、大学で深めている印象です。



ビジネスについては高校でも勉強してたんですが、調べるのもまとめるのも発表するのも個人単位でした。でも今はグループワークがメイン。人とのつながりの中で、自分の意見ばかり主張しても良いアイデアは生まれにくいことを実感しました。



グループワークは面倒なことも沢山あると思う。でも、それを克服することで、多くの学びを得ることはもちろん、人間としても成長するんでしょね。



コロナ禍の学生生活2年間を終えて3年次。ゼミが始まるわけですが、「つながり」ビジネスをテーマにする私のゼミで2人が学びたい、成長させたいと思っていることは何ですか？



私は将来、メイクの開発やPRの仕事に就きたいと思っています。メイクは、人を幸せにできる、人の心を輝かすことができるものだと思うからです。これも、開発する人、発信する人、使う人のつながりがあってこそですね。ただ、つながりというものを具体的に学ぶのってなかなか難しい…。だから、つながりに重点を置かれている牧野先生のゼミで、自分の将来へつなげたいと思いました。



私は高校時代の部活動の経験から先輩や後輩との縦のつながりの重要性を知りました。自分の夢を追いかけて努力している先輩の姿を見て、自分もそうありたいと憧れの気持ちを



抱いています。このような経験から牧野先生が大事にされている「つながり」というテーマに興味をもって…。今は縦だけでも横だけでもなく、人だけでもモノだけでもなく、さらにビジネスとビジネスの組み合わせで新しいビジネスが生まれるつながりの面白さを感じています。これが牧野ゼミを選んだ理由で、これからさまざまなつながりの形を学びたいです。

私としては、2年間で2人とも“発想”や“着想”、“分析”について十分に経験してきたと思っています。だから、ゼミという次の段階では、そこから出てきたアイデア、思いを、どうやってカタチにするかを重点的にやっていくつもりです。でも、私のゼミは「教えないゼミ」(笑)。もちろん、私が持っている知識や理論は惜しみなく伝えるし、私にできるサポートは何でもします。そのうえで、一方的に何かを教えるということはずっと、すごく近い距離と一緒に学び合って支え合う、そして感じ合ってつながり合う、そんなゼミにしたいと思っています。



今を犠牲にしない。

将来の目標の為に

宮津先生の授業の魅力

大音

宮津先生の授業はすごく面白くて、コロナ禍やオリンピックなど、常に時代に合わせたマーケティングを学べるんです。それに、何を聞いてもすぐに答えてくださるし、先生は知識もキャリアもすごいんです。企業とのコネクションもお持ちなので、ゼミではデジタル・マーケティングの分野を、より専門的に学んでいます。3年次の今年は、大学の制度を使ってビジネス統計スペシャリストの資格取得に挑戦し、将来はマーケターになりたいと考えています。桃大で、宮津先生と出会えたのは運命だと思っています。

Interview

経営学部 経営学科 3年次
大音 空央 さん

宮津

Interview

経営学部 経営学科
宮津 和弘 先生

自分で考える、幸せの追求

私の中で、大音くんを強く印象付けたのは、ゼミが始まってすぐの時期に実施したアンケートでした。「クリスマスプレゼントは何がほしい？」という問いに対し、彼は「幸せ」と答えました。実は、一流のマーケターには「常に消費者の幸せについて考えられる」という共通点があるのですが、そのためにはまず、自分自身が幸せについて考え、追求する姿勢を持たないといけません。そういう点で、彼の回答は他の学生とは違っていました。

私のゼミでは、デジタル・マーケティングに関する学びの他に「生きる知恵のようなもの」も教えています。「幸せと成功」の考え方もそのひとつ。たいていの人々は「成功を手に入れると、幸福になれる」と考えがちですが、実はそうではなく「幸福だから、成功率が上がる」と言われています。因果関係が逆なのは、様々な実例でも証明されています。彼には、私のゼミで様々な知識を学んで「常に人々の幸福について考えられる」一流のマーケターになってもらいたいですね。



香月 人や社会の役に立つ仕事がしたい。月並みだけど、何となくそんな思いで福祉の分野に興味を持っていました。ただ、引っ込み思案で心配性、おまけに優柔不断。そんな性格で、常に周りの目を気にしながらこれまで生きてきた私が、福祉の分野で人や社会の役に立つことなんてできるんだろうか…。福祉の分野で実績のある桃大への進学を決めてからも、正直不安でした。でも、同じ志を抱く仲間に出会って学んでいくうちに、不安は少しずつ消えていきました。それは、嫌いで仕方なかった自分の性格を、長所や個性として捉えてくれる先生や仲間がいたからです。今では、相談されたり悩みを打ち明けられたり、人から頼られるようになったことに自信と喜びを感じています。



しよう？

デザイン

しあわせを

誰の

今日は、

小野先生と香月さん

香月 小野先生は、「幸せはみんなで作る」をテーマに研究している、福祉のプロフェッショナルです。授業や課題で気になったことは何度も繰り返し質問する私を、いつも親身になって受け止めてくれる、心強い存在です。

小野 オンライン授業でも彼女は積極的に質問してくる。課題を出しても「納得できないから、もう一回やらせてください」と言ってきたときは、大変な熱量を感じました。可能性を伸ばしてあげたいなと思いましたね。

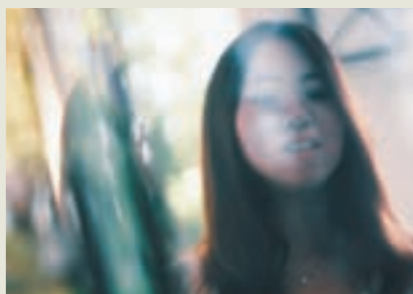


福祉って何だ？

香月 そんな小野先生からいろいろと教わった中でも、特に印象に残っている一言があります。「福祉は人のマイナスをゼロにするためのものではありません」。これを聞いてから、私の福祉に対する考え方が大きく変わりました。

小野 これまでの一般的な福祉に対するイメージは、「困っている人を、元の生活や社会の平均レベルまで戻すこと」でした。そのため、生活保護を受けている人が自動車に乗っているとバッシングを受けることもありました。「生活保護をもらっているから、普通の生活を越えてはダメだ」という風潮はおかしい。福祉の本来の意味は、「幸せ」のはずなんです。貧困というのは、生活の質に加え、その人らしい生き方ができていないということ。自分らしい生き方ができなくて悩んでいる場合は、「生き方の貧困」になる。新しい福祉を考え、SDGs、環境問題、ジェンダー問題などもしっかり学べるよう、2022年度に社会福祉学科からソーシャルデザイン学科に名称を変更しました。

香月 福祉って、誰かが誰かのために何かを施すものじゃない。善意やヘルプを一方的に押し付けて人を助けるのではなく、その人と一緒に幸せをデザインしていく。社会福祉学科(現:ソーシャルデザイン学科)で、私は本当の福祉を学びたいと思っています。





無限に広がるものがたり

誰か

自分をみせる。



最初のものがたり

もともとイラストを描くのが好きで、家でも大学でも時間さえあれば描いていました。その延長で、3次元のCGオブジェクトを作る3Dモデリングもやってみたのですが、作るだけではイマイチ物足らなくて…。作ったオブジェクトを動かす方が面白そうだったので、2週間かけてVTuberを自作。それをゼミ紹介の動画に使うってオンラインで発表したらすごくて(笑)。大きな達成感を感じました。その他にもいろいろ打ち込み、達成感を味わっています。

続き…

大学では、卒業制作として「桃大を舞台にしたゲーム」を制作しています。単位を落として留年の危機に陥る主人公の学生が、櫻井先生を美少女化したキャラクターの助けで無事に卒業するという物語です(笑)。“サボって単位を落とすと大変なことになるよ”という、桃大生へのメッセージも込めたつもりです。プライベートでは、イラスト作品をコミケに出品したことも、青色申告の個人事業主として起業したことも、自信に繋がっています。

広沢さんにとって、櫻井先生とは？

尊敬する先生です。私がどれだけ考え抜いても分からないことを質問すると、的確な答えやアドバイスで丁寧にレスポンスをくれます。オフの時も、授業や課題に関係ない個人的な相談にのってくれたり、オンラインで一緒にゲームを楽しむ場を設けてくださったり…。絶妙な距離感で学生を見守りながら、好きなことや得意なことに打ち込めるようサポートしてくれる先生です。

櫻井先生から見た広沢さん

私の専門は、経済情報処理論。情報処理や情報分析が、社会経済にどう関わっているのか。ザックリ言うと、PCやSNSなどのIT技術で何が出来るのかを研究する分野です。広沢さんが取り組んだVTuberやゲームの制作には、研究の本質がとても良く表れています。研究の内容をより分かりやすく発信するためにVTuberを作ったり、単位修得の大切さを伝えるために桃大が舞台のストーリーゲームを作ったり。どちらも、人や社会に役立つIT技術の使い方ですね。

持ち前の行動力で、アイデアや想いをカタチにしていく広沢さん。時には、行動力が裏目に出て危なっかしいこともあります。でも、それをサポートするのが私の役目。彼女のような、想いと行動力のある人の入ゼミを心待ちにしています。

好き & 得意にはとことん打ち込み



Interview

経済学部 経済学科
櫻井 雄大 先生

Interview

経済学部 経済学科 4年次
広沢 有望 さん



自分



制限されるコロナ禍。希望していた英語と韓国語をどのように学ぶ？

Wagner先生(英語)と新保先生(韓国語)のお二人がそれぞれ、オンラインでの学習会を開いてくださり、そちらに参加していました。
 新保先生は明るくて楽しくて、韓国のことはもちろん、他愛もない話も聞いてくださる。コロナ禍だからこそ、ちょっとしたことでかかわりを持ちたいと思いました。
 また、Wagner先生は英語ネイティブスピーカーということもあり、英検®やTOEIC®といった英語の資格取得に向けた勉強のため、少しでも長く先生のもとで学ぶ時間を確保したいと思いました。
 韓国語のオンライン学習会では、「冬のソナタ」の撮影地に行く旅行ツアーを企画するというテーマで、韓国の大学生と共同課題に取り組みました。それぞれが韓国語や日本語で発表資料を作成し、お互いにネイティブチェックをし合うという作業は、とても刺激になりました。その他にも、韓国の人気グループBTSのコンテンツで構成されている教材を使った、韓国教育機関の授業をオンラインで受けることもできました。

英語のオンライン学習会では、スピーキングを録音し提出するタスクに毎回取り組みました。提示されるテーマに対して、まずは自分の意見をまとめた文章を書き出し、スラスラ言えるようになるまで何度も繰り返し練習しました。この課題をこなしていくうちに、スピーキングとライティングのスキルアップに繋がったと感じました！
 提出後も、文法や発音を訂正してくださったり、内容についても細かくフィードバックしていただきました。
 コロナ禍でも時間を有効的に使い、資格の勉強にも取り組みました。去年は英検®やTOEIC®、ハングル能力検定、TOPIK、観光英語検定を受検。今年さらには上のレベルを受検する予定です。
 将来の目標は、航空関係の仕事に就くこと。残り1年を、精一杯頑張りたいと思います。



Interview
 国際教養学部 英語・国際文化学科 4年次
 戸島 夏樹さん



Interview
 国際教養学部 英語・国際文化学科
 新保 朝子先生

コロナ禍になって対面授業ができなくなり、オンラインで勉強会を開催しました。正課外ということで単位が修得できるわけでもないのに、日韓の学生たちが大勢集まってくれました。
 国は違えど、同じ境遇にある学生同士、すぐに仲良くなり、彼らの間で両国の距離がぐっと近くなったと感じました。
 オンラインを利用した両国をまたいだ勉強会などは、コロナ禍だったからこそ一気に加速したのだと思います。そしてこうした勉強会に、戸島さんをはじめ多くの学生の皆さんが積極的に参加してくれたことは、とても嬉しかったです。



Interview
 国際教養学部 英語・国際文化学科
 Adrian Wagner 先生

言語の学びには、知識だけでなくコミュニケーションが大切。オンライン中心のリモート授業で対面のコミュニケーションがとれないことは、戸島さんたち学生にとって大変な苦労とストレスがあったと思います。
 ただ、そんな状況でも戸島さんの学ぼうとする意欲がひしひしと伝わってきました。私への積極的な質問はもちろん、自身の考えや思いを発信しながら私や他の学生の話に興味深く聞き込む姿が、とても印象に残っています。学生同士、学生と教員、人と人の距離が近い桃大の魅力を変えて実感しましたね。
 コロナ禍での学びの経験は、柔軟性をもってあらゆる変化に対応する力、環境を嘆くだけでなく自身を変革していく力に繋がっているはず。胸を張って、世界へ羽ばたいてほしいです。



Interview

社会学部 社会学科 4年次
高岡 優奈 さん

木島ゼミの魅力

集まってくる学生は、音楽や写真が好きだったり、オタクだったりと積極的で魅力的な人が多い。ゼミも楽しくて、卒論の発表などでも「これいいやん」と自発的にコメントが出てくる。共通の趣味があるからしゃべりやすいし、先生がいい意味でゆるくてオタク仲間みたいだから、物おじせず何でも言い合える環境です。

TAKAOKA

方向はバラバラでも、ゆるく、お互いの価値観でそれぞれの趣味を尊重する多文化共生、多民族国家みたいになれたらと思っています。ゼミはホームで半分課外活動みたいなもんやから、卒業しても飲み仲間ていられる関係にしたほうがいい。

楽しいほうが勉強もやる気になるし、モチベーションにもつながるんです。

KIJIMA

木島先生はこんな人



TAKAOKA

先生とゼミの学生のLINEグループがあって、先生が、顔写真入りで今日は「ジョジョの奇妙な冒険」風のバスタ、などとLINEをくれるんです。皆、それを見て和んでいます(笑)。



KIJIMA

基本的にはお腹を膨らげた犬みたいなキャラクターなので(笑)、先生という感じより、親戚のおっちゃんみたいなほうがいいのかなど。親ではないけど、あなたのことを親戚のおっちゃんという立場で見えていますよという“社会的叔父、という言葉があるんです。

高岡さんはこんな人



TAKAOKA

コロナ禍でZoomを使うことが定番化して、ゼミの仲間と話し合える機会が増えました。3年次の時にゼミで4、5人のチームになり、他の大学と共同研究発表をしたんです。私たちは「クイズ文化の社会学」というテーマで、クイズ番組の視聴者側に視点を置き、学生の家族がクイズ番組を見ている時にどんな会話をしているかをスマホで撮影し、テロップを入れて編集しました。それが面白いと受けて、木島ゼミで一番いい優秀賞をもらえて嬉しかったですね。



KIJIMA

今回の高岡さんたちの研究は、メディアオーディエンス研究という人間とメディアとの関係を質的に迫る研究です。高岡さんが企画し、リーダーだったんですが、彼女はゼミのグループ全員の見せ場を作り、皆の力を結集させた。内に秘めた熱さがある静かな巨人です。



TAKAOKA

今度、卒業制作で雑誌を作ることになり、デザインやレイアウトを担当します。大学生生活最後の年を楽しみながら頑張りたいです。

楽しい時間を
考える。

Interview

社会学部 社会学科
木島 由晶 先生





ルールに熱く、日本の未来を守る 法学部 富田 健

河野先生のゼミでは、
どんなことを学んでいますか？

直井 刑事訴訟をテーマにした研究に取り組んでいます。法律に関する研究は、正直簡単ではありません。ただ、1年次から始まる少人数制ゼミのおかげで専門知識が深まり、それを生かすための考え方が身につきました。河野先生は、どんな疑問や質問に対しても教科書どおりの回答ではなく、先生ご自身の言葉で丁寧に答えてくれる心強い存在です。熱い心を持ちながら、冷静に、客観的に、多角的に物事を見る先生の姿は、そのまま私の学びになっています。

河野 直井さんは常に授業に対して積極的です。刑法の課題を出した時も、テキストデータの提出でOKなのに、彼女はプレゼンテーションまで作成し提出してくれました。また、ゼミで議論等をする場合も、口火を切ってリーダーシップを発揮してくれるなど、彼女はいつも授業に対して真剣です。

なぜ桃大の法学部へ？

直井 私は大のおばあちゃんっ子でした。おばあちゃんに「彩莉奈は警察官に向いてるね」と勧められたことが最初のきっかけです。高校生の頃には、警察官として国や社会、地域の平和と安全を守るという自分の未来予想図を明確に描いていました。桃大法学部は警察官を含めた公務員採用実績が高く、学びを更に直結させられると確信していたからです。

河野 私は大学教員になるのが遅く、経済的に苦しい時期が長かったのですが、学生たちには安定した仕事に就いてもらいたいなと思っています。もし、希望する職種に変からなくても、リスクマネジメントとして、やりたい仕事の幅が広がるようにアドバイスしています。

今も未来予想図
は変わらない……

直井 せっかくの大学生活。視野を狭めたくないとの思いから、中学校と高等学校の社会科の教員免許取得に向けた勉強にも力を入れました。教育実習で出会った生徒たちとの交流を通じて、未来予想図がより一層明確になったと思います。私は、警察官として彼らの未来を守ってあげたい。

河野 直井さんは将来、いい人材になると思います。大学でさらに培った積極性を仕事で生かしてほしいですね。

Interview
法学部 法律学科 4年次
直井 彩莉奈 さん

Interview
法学部 法律学科
河野 敏也 先生



※撮影協力：河野ゼミのみなさん